



シリーズXVI

メンタル  
ヘルスケア

## 6. メンタルヘルスにおける最近のトピックス ー 乳幼児虐待 ー

札幌市児童福祉総合センター(児童相談所) 石川 丹

### 1. はじめに

児童虐待とは身体を損傷させる身体的虐待、「お前なんか産むんじゃないかった」と子どもに向かって言う心理的虐待、わいせつ行為をする性的虐待、食事を与えない、風呂に入れないなどの不適切な養育、家庭で育てられないから施設に入れてくれという養育拒否、をいう。

児童虐待の本質は他者の存在の否定である。だから、究極的には殺人にも等しい。子供を虐待する虐待者のメンタルヘルスはどのように崩壊し、他者否定に至るのであろうか。本稿では虐待する人と虐待される子の心について述べる。

### 2. 対象と方法

平成9～10年度の受理ケースのうちの60名の被虐待乳幼児(0～5歳)について児童票(病院のカルテに相当する)を分析し、虐待者の生活歴、家庭状況、精神的経済的社会的問題、虐待理由、そして児の被害と回復の状況などを検討した<sup>1)</sup>。

### 3. 結果

60名は親子組数としては50組、子どもの平均年齢は2.4±1.7歳、男女比は1対1であった。

虐待種別は7割が心理的虐待、不適切な養育、養育拒否であった。

虐待者は実母が8割を占め、母子家庭が半数で実父母家庭は1割、生活保護世帯は3分の1であった。

実母については、当該児童出産時平均年齢23歳、未婚出産は3割、学歴は中卒ないし高校中退・卒業が9割、離婚歴は5割に上った。

虐待者の半数に精神的問題、非行歴や多額の借

金など社会的経済的問題を認めた。精神的問題は統合失調症1名、神経症圏4名、うつ病3名、人格障害7名、精神遅滞7名であった。

虐待者が述べた虐待理由の9割は聞き分けがない、反抗する、いたずらして困る、落ち着きがない、であった。これは多くの虐待者が子ども側に問題があるという認識をしていたことを示唆している。

発達の遅れ(DQ・IQ79以下)を2割の子に認めた。これは一般的な割合の10倍である。

虐待者が訴えていた子どもの問題行動はすべての子で施設入所後に消失した。

IQ・DQ79以下の子のうち虐待事象消失後1～2年で指数が9以上に上った子は6割に達した。

### 4. 考察

#### 1) 上記結果から見た最大公約数的虐待像

虐待者である実母の多くは高等教育を受ける機会に恵まれずに成人し、若くして母親となるも(最近の女性の平均初婚年齢は27歳である)、早々に離婚して母子家庭になる。経済的のみならず精神的社会的問題をも抱えながらの生活の中、児が成長し幼児期のいわゆる反抗期になると、発達的には望ましいはずの児の自己主張を受容できずに否定的抑圧的に接するようになる。そのため児はますます自己主張を強め、なだめたり透かしたりする本来の子育て技術を十分に持ち合わせていないことが推測される母親は児を疎ましく思うようになり、力によってさらに抑えようとする。こうした悪循環を繰り返すうちに、遂には虐待者に陥ってしまうという経過が乳幼児虐待事象発現の機序、といえよう。

#### 2) 虐待から解放された子どもの問題行動の有無

聞き分けがない、反抗する、落ち着きがないなど虐待者が訴えた子どもの問題行動は施設入所後に消失した。このことは虐待者の訴えた問題行動は虐待者との関係においてのみ生じたということであり、子どもの側には問題がなく、子どもに反抗的行動を起こさせてしまった虐待者側に問題があったということを示唆している。

### 3) 乳幼児を虐待する親の心

#### i) 『反抗期』

乳幼児の虐待者は虐待理由として聞き分けがない、反抗する、いたずら、落ち着きがないなどを上げることが多かったが、そのような思いに至った要因の一つには一般的にいわれる『反抗期』という言葉に問題があると思われる。

子どもは幼児期になると自我が発達し親の意向とは違う自己を言葉で主張するようになる。これは正しくは『自我伸長期』と称されるべきであるが、今の日本の文化では『反抗期』という。だから、多くの大人は子どもがこの時期になると、うちの子もいよいよ『反抗期』に入ってきた、と思うのは当然となる。さらに、反抗なら抑えねばならないと思うことも当然となる。初めは子どもに対して言葉で抑えにかかるとは、3歳前後の幼児は欲求の自己コントロールが未熟なために自己主張を繰り返す、そのため言葉では抑え切れず、子どもの自己主張を尊重するような姿勢を持って子どもに関わることが難しい虐待者は、やがて力の抑制に発展する。そうした状態がエスカレートして虐待が完成してしまう。因に子どもが、目的のために今を待つことができるようになるのは4歳である。

#### ii) 『ペット的子育て』

それでは虐待者はなぜ幼児期の自己主張を受容し切れないのであろうか。それにはいわゆる『ペット的子育て』に原因があるように思われる。

『ペット的子育て』とは乳児期の子育てにおいて子どもを思い通りに育てられているという誤解の下に、親が絶対的と信じている子育ての仕方である。見方を変えれば、子どものぐずりに対するあやし行動の不十分な子育ての仕方である。

発達心理学は乳児の心を解明し、2ヵ月齢には既に自我を持っていることを明かにしている<sup>2)</sup>。

だから、乳児期と言えども子どもは独立した人格である。このことに無知で、赤ん坊は親の言いなりになっていると誤解しながらの子育てであれば、それを『ペット的子育て』と言わざるを得ない。

虐待者の多くの人の学歴は低い。低い学歴には虐待者の親の経済的社会的問題を推測させる。そうだとすると虐待者自身の育ちも、人格を十分に認められずに心理的に恵まれていなかった可能性が高い。とするならば、自分の子どもにその人格を認められず『ペット的子育て』をする可能性も高くなる。赤ん坊のぐずりや自己主張に対して充分に関わることが少なければ、子どもが反抗するようになったと思う時に力で抑えつけようとするのは当り前のことになる。それが繰り返されれば虐待に陥ってしまうのも当然となる。

#### iii) 虐待成立への筋道

乳児期の『ペット的子育て』が『反抗期』の力の抑制につながり、親子の主張の食い違いがだんだんに大きくなり、それが『力の躰』に発展して虐待が成立する、というのが虐待発生の筋道であると考えられよう。

#### 4) 『反抗期』から『自我伸長期』へ

健康な2歳児のある母親は「反抗期は何のためにあるの?」「子どもにとっては不利でしょう?」と述べた。この発言は反抗期という言葉が大人側からの言い方で、子どもの立場を尊重する表現ではないこと、子の自己主張が親の意図に反する時それを親が反抗と思うことは間違いであることを指摘している。

親からすれば聞き分けないと映る子は、子ども側に立って考えれば自己主張が強い子とすることができる。反抗期という言葉を止めて『自我伸長期』というふうに命名すれば、反抗と映る子どもの自己主張は発達の的には正しく望ましい強い個性であることが理解され易くなる。子どもが行動に込める思い、つまり表象を理解し受容することが子育ての根幹である。『力の躰』は全否定されるべきである。

#### 5) 虐待から解放された後の子どものDQ・IQ

DQ・IQが79以下と低かった児のうちの6割が施設入所後1～2年で指数9以上catch upした。

### 6) 虐待とは“発達の剥奪”である

虐待者の言う子どもの問題行動も低いDQ・IQも虐待事象から解放されれば、消失したりcatch upすることができていたことから、児童虐待の深刻な問題の一つには“発達の剥奪”があることが示唆された。

### 7) 被虐待児童のけなげさと心の傷

筆者は児童相談所の専任小児科医として身体損傷のある子どもたちの診察をし、出血斑や傷がどういった外力でいつ頃生じたものなのかを診断し、ケースワーカーに助言している。

多くの被虐待児を診察しているうちに次のようなことに気づいた。

診察の際に傷を指差しながら「ここ、どうしたの？」と児に問うと、2～4歳であれば誰々に叩かれた、誰々がお湯をかけたなどと加害者を教えてくれる。しかし、年長幼児や小学校低学年の子は言葉を濁したり、転んだとか言っははきりしたことを言わなくなることが多い。これは年長になると自分の置かれた立場を理解できるようになるため、親（虐待者）を守ろうとする姿勢の現われであると思われる。こうした児の態度は叩かれても蹴られても親は親で、親を慕う心を垣間見せているのだと思うと、そのけなげさには目頭を熱くさせられる。自らに危害を及ぼす人を守ろうとする心は、すでに深い傷を受けてしまっていると考えざるを得ない。

小川恭子美深育成園副園長によれば、入所して来た被虐待児童は当初無理難題を職員に要求したり、いわゆる問題行動を起こして職員が味方であるかを試し、職員がこれによく対応すると次に依存を現わす。児と職員の信頼関係が成立した後でも職員が親を非難するようなことを言うてしまう

と、児に形成された職員への良好な心情は失われてしまうことがあるという。殴られても叩かれても親を慕う子どもの心情は、けなげ、としか言いようがない。

### 8) 虐待の世代間連鎖の切断

Egelandら<sup>3)</sup>は虐待の連鎖を断ち切ることができた被虐待歴のある母親は、子どもの時に虐待者ではない大人の情緒的支援を経験し、人生のある時期に治療を受けたことがあり、配偶者とは十分に非虐待的、安定的、情緒的、支持的な関係を持つ傾向が有意に高かった、と報告している。

## 5. おわりに ～児童虐待消滅への道～

児童虐待に関わる人間が親身になって子どもを支えると同時に、日本の子育て文化を子どもの側に立ったものに変えることが虐待消滅への道である。

厚生労働省は虐待予防策の一つとして子育て支援の充実を挙げているが、子育て支援の内容を充実させるためには『子育て学』ないし『子ども学』の研究が必須である。

昨秋、日本子ども学会が設立されたが、道内にはそれに先駆けること8年前から北海道子ども学会（HP；<http://homepage2.nifty.com/kodomo-gakkai/>）がある。

### 引用文献

- 1) 石川 丹：札幌市児童相談所における虐待123事例の研究.社会福祉研究84,2002,97-102.
- 2) 石川 丹：発達障害幼児療育学序論I. そだちと援助1,2002,9-21.
- 3) B. Egeland, et al : Breaking the cycle of abuse. Child Development59,1988,1080-88.